



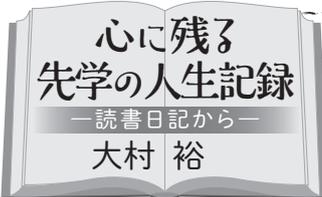
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.231
2022.12.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第31回

井上光貞『わたくしの古代史学』 (文芸春秋社 1982年)

井上光貞(1917~1983)が企画委員として参画した中央公論社『日本の歴史』全26巻は、歴史関係の啓発書としては異例のベストセラーとして、今も読者を捉えて離さない稀有の歴史書シリーズである。私は高校の歴史教師として、もちろん全巻(中公文庫版)を何度も読んだが、この中で最も印象が深かった巻の一つが、井上光貞『日本の歴史1 神話から歴史へ』であった。読後感を今思い起こしてみると、第一に非常に読みやすいということ、第二に多様な分野の業績を要領よくまとめていること、第三に文体がとても優しく、温厚な人柄がにじみでていること、第四に自らの「発見」が随所にちりばめられていて、おおいに好奇心をそそる内容であること、等々である。本のカバーの裏を見みると、井上は東京大学の教授にして、祖父は「井上馨と桂太郎」とあった。頭脳明晰なだけでなく、育ちがすこぶる良い学者ということを知った。

井上光貞は1917(大正6)年、井上三郎(明治の元勳桂太郎の次男・侯爵)と千代子(明治の元勳井上馨の長女)の長男として生まれる。本書に幼少時の回顧はない。旧制・成蹊高校(理科乙類)の時、腎臓炎に罹り、学業が遅れたこともあって「文転」を決意。一年落ちて、文科乙類に編入する。しかしここでも腎臓の病気が再発して更に一年留年したという。井上の文章にエリート臭が全く感じられないのは、こうした艱難に耐えてきた故であろうか。それにしても、父親が病弱の息子の通学の便宜をはかるために、成蹊高校の近くに別宅を建ててやったという事実は、さすが侯爵家という感を抱かせる。

成蹊高校の文科では、西洋史担当の藤原音松の感化によって歴史学に目覚めたという。藤原は考古学も好きで、武蔵小金井の遺跡で住居址が発見されると井上を発掘現場に誘ったり、甲野勇や杉原莊介とつれだち、千葉県・龍角寺古墳群の見学に連れて行ったりした。そのような刺激を受けたことが契機となったのか、井上は高校内に歴史同好会をつくり、月に一回研究会を開いたり、卒業生に講演をお願いしたりしている。ちなみに藤原の教え子には、日本近世史の児玉幸多やギリシャ史の村川堅太郎、アメリカ史の長老中尾健一などがいた。恐らくこうした綺羅星のような諸先学と交流する過程で歴史学にのめり込んだものであろう。この時期の読書傾向は、広く浅く万遍ないものであったが、特に熱心に読んだのは、マルクス主義関係文献と津田左右吉の記紀批判に基づく一連の著書であった。「古事記や日本書紀の、神話のもとより歴代の皇室の事蹟など」は「6世紀ごろの朝廷で、皇室の由来と、王権としての正当性を根拠づけるために政治的に述作したものである」という津田の視点は、以後の井上による日本古代史研究の基礎となったように思われる。

1940年に東京帝国大学文学部国史学科に入学する。井上が国史学を専攻するにあたって抱いた問題意識は、「現代の国家はどのような構造を持っているのか」「国家は、また天皇制はどのようにして形成さ

れたのか」「儒教や仏教は日本ではどんな役割を果たしたのか」というようなものであったが、これらは終生の研究テーマとなっていることに驚く。学部では古代史の坂本太郎の講義に感銘を受け、日本古代史を生涯の専攻とすることになる。1942年に学部を卒業するが、くだんの大病がまだ癒えていなかったために兵役を免れ、そのまま大学院に進学する。大学院進学のための目的は、古代思想史(仏教史)の研究であった。面白いことに、指導教官には坂本を選ばず、倫理学教室の和辻哲郎を選んでしまう。恩師の坂本太郎はよく許したと思う。後年、「郡評論争」で坂本と井上はやり合うが、井上は終世坂本を慕っていたし、坂本も井上を高く評価していた。お二人の度量の広さに感服する次第である。

さて、井上が和辻を指導教官に選んだ背景には、井上家の家風が影響していたらしい。光貞の祖父は、かの「鹿鳴館外交」を展開した「西洋かぶれ」の井上馨である。その養子の勝之助は外交官、その妻の末子は英・独・仏語を自在に操る国際人であった。勝之助の養子・三郎(光貞の父)もドイツ語が得意で、陸軍の予備役となった後は日独文化協会の会長となっている。こうした環境の中で育ったので、ニーチェやキルケゴールに心酔し「異邦人」の眼で日本文化を見直していた和辻の学風が井上には好ましいものとして映ったのである。戦後、井上はアメリカに渡って米人の日本史研究者と交流し(1961~62年)、西欧史の教養を踏まえた彼らの日本史研究の実際を知って感銘を受け、自らの日本史研究に役立てているが、井上の、日本古代史を鳥瞰する姿勢(「蛸壺」に籠っていないので、難解な事実も読者に分かりやすく説明できる)は、このような経緯から形成されたのであろう。

井上の古代史研究のもう一つの特徴は、評価の分かれる記紀の記事も、徹底的に批判的な分析を加え、「生かすべきは生かす」という態度である。この仕事を効率的に進めるために、井上は「日本書紀研究会」に参加して、坂本太郎・福山敏男・家永三郎らと毎月日本書紀の輪読を重ねている。この過程で、「大化の改新の詔」の一部が、後年の大宝律令に拠って書かれていることを発見するのである(「郡評論争」の口火を切る)。共同研究では、この他、「古代史談話会」にも参加している。日本古代史を研究するには日本の文献史学だけでなく、東洋史・人類学・考古学の共同で進めるべきとの考えのもとに創設されたもので、東洋考古学の三上次男、日本考古学の後藤守一・八幡一郎、人類学の鈴木尚、民俗学の和歌森太郎らが加わっている。他分野の学問を導入するのにアレルギーを起こさない井上の研究態度はこのような過程で育まれたものと思われる。そして、東大退官後、国立歴史民俗博物館を立ち上げるにあたって、日本史・考古学・民俗学の協業研究機関とする構想もこうした体験から生まれたものであった。

以上、井上の研究の軌跡を辿ってみると、冒頭における私の中公文庫版『日本の歴史1』に対する感想は、あながち的外れなものではなかったと得心するのである。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第31回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第224回)	小林萌絵 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第6回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「歴史考古学大辞典」	河合英夫 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第6回)

山本 暉久

5. 大学での考古学 その3

大学1年生の夏休みは、発掘の日々を過ごした。ほんの1年前、受験勉強に明け暮れていた時と比べると雲泥の差である。今回は、1年生の秋以降の発掘について触れてみたい。1965年9月、横浜市西区軽井沢にある前方後円墳(軽井沢1号墳)の調査に短い期間ではあったが参加した。ここで、調査を担当していた和島誠一・甘粕健先生らが中心となる「武蔵地方史研究会」(通称「武研」)の存在を知った。10月に入って、千葉市加曽利貝塚の調査に参加した。それまで行われていた南貝塚のトレンチ調査の補足調査(貝層の土層断面図の追加作成作業)で、鈴木公雄先生が指導する慶應義塾大学の調査に加わったものである。はじめて他大学の調査を知り、同じ考古学でも大学により違いがあることを知った。続けて、加曽利北貝塚を調査していた明治大学の調査に参加した。後藤和民先生が指導して行われていた調査で、貝塚の調査を本格的に体験することとなった。北貝塚の貝層セクション図を作成したあと、後藤先生に図面を見せた時、「じゃ、この土層図に従って掘りなさい!」と言われたとき、少しばかりショックを受けた。というのは、セクション図の線引きにあまり自信がなかったからである。

文学部の史学科資料室の向かい側にある、1階の階段下の狭いスペースが遺物整理室となっていて、そこには第三京浜道路建設に伴って櫻井先生が団長となって調査した、縄文前期の横浜市都筑区(旧・港北区)折本貝塚の出土遺物が水洗いしたあと、イチゴ箱に収納されて山と積まれていた。発掘に参加していない時(もちろん授業時間外であるが)は、この出土遺物の註記作業をするのが日課であった。面相筆と呼ぶ、穂先がきわめて細い筆を用いて註記する作業は、単調で根気があるものであったが、土器(片)の文様と特徴を知るうえで貴重な経験となった。考古学は「モノ」と直に対面することが必要なことを学んだ。

11月には、西村正衛先生による、千葉県香取郡神崎町西之城貝塚第3次調査と武田貝塚(神崎町新貝塚)の第1次調査に参加した。西村先生は、多年にわたり、利根川下流域の縄文時代貝塚の調査を継続されており、その調査成果は、早稲田大学教育学部の『学術研究』や早稲田大学考古学会機関誌『古代』誌上などに多くが報告されているが、その集大成として、1984年12月に大著『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—』(早稲田大学出版部刊)が刊行されている(写真参照)。西村先生の考古学の神髄は、のちに、大学院での講義を受けて、より深く知ることになるが、この時、先生の考古学のひたむきな姿勢に驚かされた。まず、発掘に参加するに際して、参加費千円を納め、かつ、お米を持参する(1升か2升だったか?)ことが条件であった。このころ、遺跡の発掘調査は開発に伴う調査が徐々に増え始めた時期に相当するが、西村先生は、あくまでも、自分の研究目的に沿って学術調査を貫いていたのである。そのことだけでも尊敬に値した。

この調査には想い出が多い。西之城貝塚は、1963年11月の第2次調査で縄文時代初頭の井草式土器を伴う竪穴住居址

が発見されたことで注目されていたが、今回の調査は、この住居址保存に向けた周辺部の調査であった。古墳の封土下にヤマトシジミを主体とする貝層が存在し、住居址の一部は古墳の周溝により切られていた。この調査で口縁部が大きく外反する特徴をもつ井草式土器片を掘り出して直に触ることができたことに感動した。宿舎は、今はあるかどうかかわらないが、「青年研修所」というところで、ここで地元の方にお世話になって食事をとることができた。とにかく、若く、食欲旺盛のわれわれは、まずどんぶり飯一杯目をいかに早く食べて(掻き込んで)、二杯目のおかわりにありつくか、というのが競争でもあった。とにかく良く食べたという記憶が残っている。

この西之城貝塚の調査を終えて、引き続き武田貝塚(報告では、神崎町新貝塚)の調査に入った。後・晩期の貝塚で、ここで、はじめて「土器塚」なる存在を知った。貝層下に中期末の竪穴住居址が検出され、私は参加しなかったが、第2次調査で完掘されている。3日間という短い調査であったが、ここで西村先生のエピソードを紹介しておこう。調査の最終日の午後、作業が押せ押せになっていた時、突如、先生が円匙を自ら振るいながら埋めはじめたのである。トレンチにはまだ学生たちが作業中であったのだが、先生としては、調査最終日のギリギリだし、埋め戻さなければならないから、切羽詰まって自ら埋め戻し始めたのであろう。われわれもこれには慌てて急いで調査を終えて、埋め戻し作業に加わることとなった。開発に伴う調査の場合、埋め戻し作業などはないし、あったとしても重機を用いる場合が多いけれども、当時は人力で埋め戻すことが当たり前であった。この作業は本当につらく体力の消耗も著しい。なにせ、調査最終日に短時間で埋め戻さなければならないのだから・

12月に入って、川崎市高津区新作八幡台遺跡、新作大原遺跡の調査に参加した。この調査は当時、川崎市の文化財調査員であった渡辺誠先生が調査を担当した遺跡で、岡田威夫先輩の紹介で参加したものであった。渡辺誠先生と村田文夫さん(川崎市教委)にはじめて出会うことになった。かくして、入学した1965年はあつという間に過ぎ去ってしまった。



「利根川下流域の研究」箱表紙

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英次記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 224

七ノ域遺跡 ～神奈川県平塚市

小林 萌絵

今回、私が紹介する遺跡は、神奈川県平塚市に所在する「七ノ域遺跡」である。

平塚市は、神奈川県のほぼ中央南側に位置しており、平塚市の南部は相模湾に面している。平塚市域の地形は、相模湾に注ぐ花水川流域の左岸に広がる沖積平野地帯と、右岸の台地・丘陵地帯に大きく分かれている。

沖積平野地帯は、相模川および金目川水系の河川によって形成された北部の自然堤防と後背湿地地域、南部の砂州・砂丘地域に細分されている。砂州・砂丘地域は、縄文時代中期の縄文海進による海面低下に伴って形成されたものである。

平塚市域では、旧石器時代から近世までの約300箇所の遺跡が周知されている。平塚市北部や底部の台地上には、各時代の集落のほか、古墳時代の墳墓が多数確認できる。また、沖積平野地帯では、奈良・平安時代までの遺構や遺物が多数検出している。沖積平野地帯で検出する遺跡の多くが、砂州・砂丘上に立地している。今回紹介する七ノ域遺跡は平塚市域の中央東寄りに位置しており、砂州・砂丘上に立地している。

七ノ域遺跡は古墳時代後期以降の集落跡である。また、この遺跡を含む周辺地域は、周知の埋蔵文化財包蔵地が密集している地域であり、近年では街路整備事業に伴う発掘調査が多数実施されている。

七ノ域遺跡ではこれまでに10地点の発掘調査が実施されている。

第2地点では、古墳から奈良時代までの竪穴建物跡34軒、掘立柱建物跡6棟、土坑16基、井戸跡5基、溝状遺構78条、ピット547基、不明遺構3基が検出している。主な出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品等である。特筆すべきは、溝状遺構を挟んだ東側と西側で、検出する遺構の様相が異なる点である。溝状遺構の西側は、東側と比較すると竪穴建物が大型である。また、大型の鉄製鍵が出土していることも、特筆すべき点である。

第3地点では、奈良・平安時代の竪穴建物跡9軒、掘立柱建物跡9棟、柵列1基、井戸跡1基、溝状遺構7条、ピット203基、不明遺構2基が検出している。主な出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器である。特筆すべきは、6間×2間の大型掘立柱建物跡が検出している点である。

第4地点では、奈良・平安時代の竪穴建物跡4軒、溝状遺構が1条、ピット11基が検出している。

第5地点では、奈良・平安時代の土坑3基、井戸跡8基、溝状遺構16条、ピット139基、不明遺構5基が検出している。主な出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器などである。特筆すべきは、この地点から竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出していない点である。

第6地点では、古墳時代後期から平安時代の竪穴建物跡21軒、掘立柱建物跡8棟、柵列1基、土坑14基、井戸跡2基、溝状遺構17条、ピット314基、不明遺構4基が検出している。主な出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、鉄製品、銅製品、鉄滓である。特筆すべきは、7世紀後半と考えられる竪穴建物跡2軒と円形周溝墓1基が検出した点である。

第7地点では、古墳時代後期から奈良時代の竪穴建物跡2軒、溝状遺構9条、土坑12基、ピット18基が検出している。主な出土

遺物は、土師器と須恵器である。

第8地点では、奈良・平安時代の竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡1棟、土坑25基、溝状遺構3条、ピット17基が検出している。主な出土遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、石製品である。特筆すべきは、2間×6間以上の掘立柱建物跡が検出している点である。

第9地点では、奈良・平安時代の竪穴建物跡8軒、掘立柱建物跡2棟、土坑120基、溝状遺構4条、ピット97基、不明遺構3基が検出している。主な出土遺物は、奈良・平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、鉄製品である。

第10地点では、平安時代前期以降から中世の土坑131基、ピット123基が検出している。また、奈良・平安時代前期の竪穴建物跡45軒、掘立柱建物跡4棟、竪穴状遺構9基、井戸跡4基、溝状遺構10条土坑57基、ピット149基が検出している。古墳時代後期の竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡4棟、柱穴列1基、竪穴状遺構3基、井戸跡1基、溝状遺構7基、たまり状遺構1基、土坑74基、ピット146基が検出している。主な出土遺物は、奈良・平安時代前期の土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土鎌、瓦、石製品、鉄製品である。特筆すべきは、古墳時代後期から平安時代前期まで竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出している点である。このことから、この地点では古墳時代後期から始まり、奈良・平安時代が盛行情で、それ以降に廃絶していくことがわかる。

第11地点では、奈良・平安時代の土坑34基、溝状遺構7条、ピット12基が検出している。主な出土遺物は、奈良・平安時代の土師器、須恵器、鉄製品である。特筆すべきは、円形土坑から、詳細不明だが鉄製品がまとまって出土した点である。また、東に隣接する第4地点では、竪穴建物跡が多数検出しており、土地利用の相違があることがわかる。

七ノ域遺跡では、奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡といった居住域と考えられる遺構が多数検出している。その一方で、竪穴建物跡等が確認できない箇所も存在している。このことは、一つの遺跡内で、同時代での土地利用の相違を確認できることを示している。また、七ノ域遺跡を含む周辺19遺跡が、相模国府の域内にあたると考えられていることから、七ノ域遺跡内における、土地利用の相違は、相模国府の主要領域とそれ以外の領域との相違を示している可能性がある。

七ノ域遺跡および周辺遺跡における開発事業に伴う調査は、未だ続くことが予想される。今後の調査およびそれに伴う研究が進むことで周辺市民の地域史の理解に繋がることを期待したい。

参考文献：

- 秋山重美ほか2013「七ノ域遺跡第7地点都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う発掘調査」[神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書15]株式会社玉川文化財研究所
 伊丹徹ほか2014「七ノ域遺跡第8地点都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う発掘調査」[神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書26]株式会社アーク・フィールドワークシステム
 市川正史2018「七ノ域遺跡第9地点都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う発掘調査」[神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書70]株式会社アーク・フィールドワークシステム
 宇井義典ほか2022「山王B遺跡第15地点・七ノ域遺跡第11地点都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う発掘調査」[神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書93]大成エンジニアリング株式会社
 上原正人・菅沼圭介2009「七ノ域遺跡—第3・5地点—」[平塚市埋蔵文化財シリーズ43]平塚市教育委員会
 上原正人・中嶋由紀子2019「七ノ域遺跡—第6地点—」[平塚市埋蔵文化財シリーズ48]平塚市教育委員会
 太田雅晃ほか2021「七ノ域遺跡第10地点都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う発掘調査」[神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書82]株式会社玉川文化財研究所
 栗山雄輝1998「七ノ域遺跡—第2地点—」[平塚市埋蔵文化財調査報告書第15集]平塚市教育委員会

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは滝沢勇馬さんです。

考古者の書棚

「歴史考古学大辞典」

小野正敏・佐藤 信・館野和己・田辺征夫 編／株式会社吉川弘文館(2007) 河合 英夫

私が考古学に興味を持ち始めたのは高校生の頃であるから、かれこれ50年余りに遡る。きっかけは、高校時代の社会科(世界史)の担任であった大河内隆先生であった。先生は、漢代政治制度史の泰斗鎌田重雄先生に卒論指導を受けられ、のちに前漢の西域経営や西域進出と烏孫との関係、さらには中央アジアの遊牧民族烏孫に関する論考を中心に、邪馬台国や唐招提寺の創建に関する研究など、幅広くされていたが、原点は少年期の日本古代史にあり、そこから東・中央アジア研究に拡散していったらしい。そんな先生の影響から高校生の頃より邪馬台国や古墳時代に興味を持ち始めたのである。

当然、授業はそっこのけで、先生から頂戴した藤間生大の『埋もれた金印』や『倭の五王』(岩波新書)、三笠宮崇仁編『日本のあけぼの』(カッパブックス)などを読みふけた。また当時、発刊したての『古代の日本』全9巻(角川書店)もその頃、図書室で愛読したシリーズ本であった。

昭和48年に大学に入学し、その年の夏から先輩に連れられ現場デビューとなった。発掘現場は、まさに教室そのもので、考古学のイロハを学んだ。今でもスコップで土を投げるのがあまり苦にならないのは、その頃に身につけた技術(エンピ投げ)であろう。また、ほぼ月一の割合で足を運んだのが、神保町界隈の古書店街である。小宮山や慶文堂、南海堂などであるが、どれも高嶺の花で手の届かないものが多かったが、『井戸尻』を定価で買ったのは掘り出し物と思っている。

4年次に自然気胸で倒れて3ヶ月の入院を余儀なくされ、約1年間のブランクがあったが、卒業して今年で45年になる。職場である(株)玉川文化財研究所では創立期からの所員として42年を数えるまでになった。その間、一貫して「考古学」(埋蔵文化財調査)を生業としてきた。考古学の方法論に立脚した見地に則し考え実行する業務である。そのための資料として遺跡調査報告書が必要不可欠となる。地域や時代を限っても到底全部など揃えきれないが、それでも若い頃はだいが買いまくった時期がある。報告書以外では、研究書や専門書、普及・啓蒙の本、シンポジウム資料やそれらをまとめた本、学会誌、博物館や資料館などの研究報告や企画展資料、辞書・辞典などの書籍もあり、見渡すと実に多岐にわたっている。

卒業してから45年の時が流れたが、知らず知らずに本棚も満杯となり、本棚の前に平積みした時期もあった。家族らの不評もあってこれは拙いと思い何年か前に常時必要なものと、そうでないものに分け、後者を実家に移したところ、自室も書齋らしくなってきた。この整理により職場の書庫、実家の書庫、我が家の書齋の3カ所が私にとっての仕事場となった。

狭い書齋のため整理しても増えつつあるのが実情であるが、本題の我が家の書棚にある辞書・辞典類について紹介したい。

机のすぐ脇にあって、岩波国語辞典(第四版)、角川新字源、広辞苑(第七版)とともに何時でも取り出せる位置にあるのが辞書・辞典類である。辞書引き学習法という学び方があるが、辞書・辞典は知識の宝庫である。自らが学ぶ、辞書を引く、言

葉の意味、背景、用法、内容を確認するうえで刺激になる。

考古学の辞典類で最初に手にしたのが水野清一・小林行雄編『図解考古学事典』。よくお世話になっているのが大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』、田中琢・佐原真編集代表『日本考古学事典』、小野正敏・佐藤信・館野和己・田辺征夫編『歴史考古学大辞典』、永原慶二監修『岩波日本史辞典』。

このほか、江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編『新日本考古学小辞典』、斎藤忠著『日本考古学用語辞典』、同『日本考古学史辞典』、大塚初重・小林三郎・熊野正也編『日本古墳大辞典』、坂詰秀一編『仏教考古学事典』、小林達雄編『総覧縄文土器』、小野正敏編集代表『図解・日本の中世遺跡』、江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』、角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典』などがある。

考古学用語の多くは、昔からの先例に倣った用語や、明治以降に考案・創案された造語が慣用的に使われてきたもの、先行研究のなかで生まれたもの、西欧考古学の訳語、近年の造語、また同一資料に対しても異なる用語があるなど、学術用語であるが故に複雑にして多岐にわたっており、考古学を細解くうえで、これらの辞書・辞(事)典は有用と考える。

そのなかで、今回紹介したいのが、小野正敏・佐藤 信・館野和己・田辺征夫編『歴史考古学大辞典』(吉川弘文館)である。歴史考古学と謳っているが、関連分野は古代・中世・近世はもちろん近代遺産や戦跡といった近現代の遺跡・遺構まで、対象領域を広げており、歴史学・考古学・民俗学・美術史・建築史など、幅広い学問分野の成果を取り込んでいる。また、収められた項目は、遺跡・遺物・典籍・宮城・城館・城郭・寺院・建築・民俗、さらには地名、沖縄・北方地域などにも及んでおり、これら資料を日本史上に位置づけ、近年の歴史考古学の成果を体系的に整理した歴史学辞典である。

「ここでいう歴史考古学は、学問方法を異にする歴史学・考古学等の協業にもとづく「学」であり、けっして考古学の一分野でもなく、また歴史学に考古学が従属するというものでもない」(序)との視点は、今日の学問的成果を盛り込んだ新しい歴史考古学の領域といえよう。

最新・重要な3,270項目すべてを平易簡素な文章で記され、図版や表を多数掲載し、別刷図版(絵巻、甲冑、荘園図、正倉院宝物、屏風、装飾古墳・壁画古墳、木簡、陶磁器)8テーマを色鮮やかなカラーとして収録する。また、項目ごとに参考文献が付されていることは利用者にとって嬉しい限りである。

考古学の本質は、発掘調査によって得られた資料の研究によって過去の歴史を復元することにあり、本書はその参考となる基本図書である。また、読む辞典としても楽しめる。

アルカ通信 No.231

発行日	2022年12月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp